私たちの大切にしたい相談活動

〈最終回〉

一番変革を迫られていたのは自分自身

発達保障研究センター理事長
品川文雄

その子らしさを見つける努力

いつも私は子どもをとらえるとき、チェックリストなどではなく、子どもが表現するしぐさや行動、ことばそのものをとらえ、その意味を考え共感しつつ、そのうらにある思い・ねがいを探ってきました。同時に父母がそれらをどうとらえどう変えたいのか、それは子どもの思い・ねがいと合致するのか、一緒に考え悩み、一緒に行動し確かめてきました。うまくいかないときも多いですが、一緒に考え悩み、一緒に行動し確かめてきたことは、次の一歩につながると思っています。

もう一つ思うことは、子どもの誰もが個性的で誰一人同じではないということです。同じ障害でも同じ発達年齢でも誰ちゃんらしさで輝いています。共通することをふまえつつ、その子らしさを見つけることに努力してきました。

生活を知れば行動の意味が

休日の出来事を話すお話し会は話す力を育てるために始めましたが、これを行うと生活のなかの子どもが見えることに気づきました。家でどんな暮らしをしているか、家の人とどんなことをし何を楽しみに過ごしているかなどが見えます。定点観察のように思います。話す中身は大きく変わることはありません。変わらないからこそ少しでも変化があると、「おや、何かある」と気づくのです。

「Bちゃんちに行ってゲームしました」。これは最近毎週聞いているぞ。「何時に行ったの」と尋ねると朝の9時と答えます。土曜も日曜も友だちの家数軒を渡り歩いたとも。

ここまで聞いて最近のAの様子を思い出しました。その日の打ち合わせで「休日のAの生活、どう考える？　休日9時と言えば、どの家も食事中かも。友だちの家に入り浸っているけど、親は不思議に思わないのかな」と問いかけました。

これに対し支援員の女性から「実はAは最近体を近づけベタベタと甘えるんです」、さらに「先生たちの前では決してしないけど、最近小さい子の言葉やしぐさにいらつき手がでたり陰でいじめるように。みんなに優しい子だったのに、おかしいです」。

きっと何かある。

「やはりわかりますか。実は今夫婦関係が最悪で刃物が飛び交い食事もゆっくりできないのです」と、父親。校外で学習すると必ず母親と会います。商売しているので家にいなければならないのになぜここにいるの？と思っていました。そこで家族のことを話し合うなら父親と判断し、別件で来てもらったのです。

父さん母さんの心の動き、暮らしぶりを子どもは感じ、その一挙手一投足に投影します。でもストレートには投影しません。Aの場合は小さい子をいじめる形で表れました。いじめたら怒らないわけにいきません。怒りましたが、「何かある」と思ったときから、怒る質を変えました。頭ごなしに「小さな子をいじめる、とんでもない奴」から、「『君もツライよね』と一呼吸おき、『だからといって、いじめるのはどうかな』」に変わったのです。

その後、父と母は離婚し修羅場からAは逃れられましたが、寂しい表情は消えませんでした。子どもの生活を知れば、目の前で示す子どもの行動の意味がみえ、働きかけも変わるのでした。

今、必要な課題を見つける

入学して初めての面談、本来ならCをどうとらえ働きかけるかを話すべきなのに、主に話したのはCの入学にあわせ転校した姉のことでした。「友だちと仲良くしているけど、時折寂しそうな顔になるのが気になる。Cは僕らにまかせ、お姉ちゃんを見てあげて」。

2歳で言葉の後退を感じ、健診のたび何で私の子どもが…と、もがき悲しみ苦しんだ母。集団が大切、早く入れようと、年少で幼稚園、年中からは通園施設に通う日々。そんな熱心・ガンバリ母を見たとき少し力を抜こう、もう一人、大切な姉に目を向けよう、ほらサインを出してると思ったから。Cにとっても家族にとっても、今必要なのは母が姉に心を向けることだと感じたからでした。

「すごく嬉しかった。姉もCも見守られているな～と感じました」と語ってくれましたが、このことを本格的に考えられたのは、姉が進退窮まって学校に行けなくなってからでした。

一緒に考え悩み、一緒に行動

一人で下校するようになったCでしたが、家になかなか帰り着きません。犬やネコと遊びたいCは庭に入り込みホースで水をかけ挑発、吠えられるのを楽しんでいたのです。せっかく一人下校確立～自立への一歩と思っていた母はため息の連続、息子を外に出したくない心境に陥っていました。そこで相談がありました。

母　どうしたらいいんでしょう。もう嫌だ！（と怒り爆発）

品　一人で帰れるようになったのだから、今止めてはダメです。

母　息子は十数軒に迷惑かけているんです。危ないし心配だし、親としては勘弁しての心境です。

品　お母さんはCを自分の手の平の上に置いておきたいんだよ。危なっかしいけどCは一歩を歩み出したんだ。道草する権利って知ってる？　子どもは道草が大好き。楽しいし、いろいろ学ぶよ。

母　……

品　でも辛いよね。一緒に詫びに行きCのことを知らせましょう。

後日、母と私は迷惑かけてる家々に行き、頭を下げCのことを話しました。どの家も怒らず心配してくれました。一番心に染みた方は、見た目怖そうなおじさん。「お母さん、あの子は一人で育てるんじゃない。地域で育てるんだよ」と言ってくれたのです。

子育ての重みと尊さを知る

父母との関係で困難に陥ったとき、いつも立ち戻ったのは茂木俊彦さんの『教育実践に共感と科学を』（全障研出版部、絶版）の一節です。

「一人ひとりの父や母が、自らの生活や労働をなんとか続けながら、同時に子どもを育てているという、この重い事実にまずもって目を向け、心をよせていきたいと思う」「子育てのいとなみのすべてに、父母はたいへんな苦労を強いられる。障害が重いばあいなどは、それが何年間も続く。それは（中略）つらさを伴っており、ときにはそこから逃げ出したくなるような性質のものである。けれども圧倒的多数の父母は逃げ出すこともせず、ともかくも子育てに取り組んでいる」「父母のこの努力にまず敬意を払い、共感する心をもつことをしたいと思う。そのことが教師と父母が真の連帯を築いていく基礎であると考えるからだ」。

行動の意味がわからず働きかけがうまくできなかった子ども、激しい行動をしているのに目の暗い子ども、衣食に事欠き命の危険にさらされている子ども…。どの子にも私は激しく揺さぶられ、その度に教育の組み立て方も人間のとらえ方も生き方そのものも変えざるをえませんでした。そうしなければ子どもの課題にこたえられなかったからです。子どもの発達を願い働きかけをしているといいながら、一番変革を迫られていたのは自分自身だったのです。

（しながわ　ふみお）

「発達保障のための相談活動」を拡げる学習講演会

日時／3月4日（日）10時～16時30分（受付9時30分）
会場／滋賀県大津市・龍谷大学瀬田キャンパス　2号館120教室
テーマ／重症児の療育・教育・地域活動を支える相談活動
事例検討①「重症児の育ちと家族の生活の過程、その節々で必要だった発達相談を語る」小川真奈美（保護者）
事例検討②「重症心身障害をもつ19歳の息子の育ちと支援の課題」高橋真保子（コスモス）
講演「重症児の発達診断と生活創造」白石正久（龍谷大学）
グループトーク
参加費／2500円
主催・問合せ／発達保障研究センター☎080-4332-2601